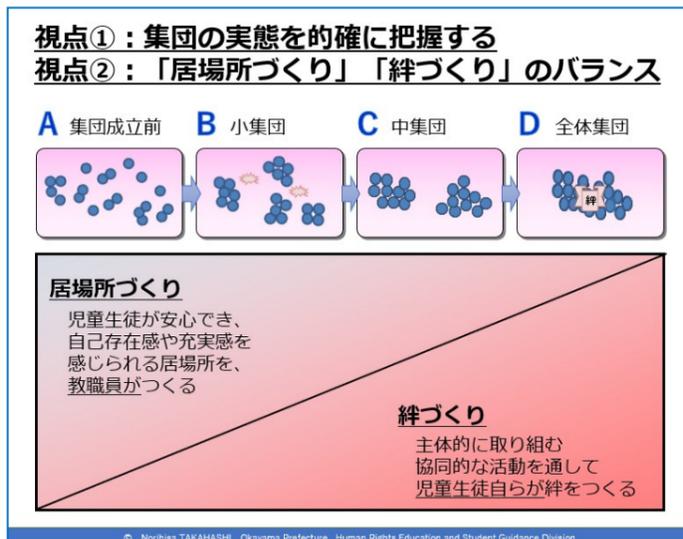


## バランスについて

個人的な感覚かもしれませんが、教育の話題は「振り子」の考え方で語られることが多い気がしています。本来は一体的に進めることが求められている「協働的な学び」と「個別最適化した学び」も、十分に一体的に捉えられているか疑問を持っています。古くは「基礎か発展か」といった議論もありました。生徒指導においても、「個別支援」と「集団指導」はどちらか一方ではなく、どちらも大切。「振り子」ではなく「バランス」だと思うのです。そのバランスは、学校の実態や1人1人の児童生徒の状況によって異なり、その見極めこそ教師の大切な仕事だと思うのです。

振り子は一度動き出すと、振り切ってしまうまで止まりません。そして必ず全く反対の方向に戻っていくという特性があります。一方で、バランスを計る「天秤」は、どちらかに傾いても、均衡を保つ力が生まれてきます。

「居場所づくり」と「絆づくり」も同じだと思うのです。学級は生き物と言われますが、時々刻々と変化するものです。進級・進学時に集団のメンバーが大きく替わるタイミングでは、その変化は凄まじいと言えるでしょう。そんな時は、「居場所づくり」から始め、当面はそこに注力する。そして安全・安心な風土が醸成されたことを見極めつつ、徐々に「絆づくり」にウェイトを移していく。天秤ですので、もし、絆づくりがうまくいかなければ、もう一度、「居場所づくり」に重きを置き、バランスを保つ。その基準はあくまでも「子ども」の姿。当たり前前のことですが大切なあとと思うのです。（高橋）



【図】学級集団の状態と「居場所づくり絆づくり」



# 生徒指導

# Leaflet @ OKAYAMA

リーフ

誰一人取り残されない岡山県の教育に向けて

# 「目的」「目標」 「手立て」「視点」

岡山県教育委員会では、「学校を誰もが通いたくなる魅力ある場所に」することを第一の柱に掲げ、「新岡山県不登校総合対策～OKAYAMA夢に繋がる学びプロジェクト～」を推進しています。

学校を魅力的な場にするには、不登校に限らず様々な教育課題の改善につながるものですが、具体的にはどのように取り組む必要があるのでしょうか？『生徒指導提要』の考え方や国の研究成果等を踏まえて解説します。

岡山県教育庁  
人権教育・生徒指導課

〒700-8570  
岡山県岡山市北区内山下2-4-6  
Tel:086-226-7589 Fax:086-224-2134

## Q. 魅力ある学校づくりと居場所づくりと絆づくり、生徒指導の視点などの関係について教えてください。

A. これまでも魅力ある学校づくりに関連する内容は、何度か紹介させていただきましたが、パーツに散らばっていましたので少し整理します。

まず、「魅力ある学校をつくる」というのは「目的」です。つまり、最終的に成し遂げようとする事柄や目指すべき到達点だと言えます。これを共通理解して全員で目指していくことは重要ですが、どのように取り組むか？具体化する必要があります。

そこで重要になるのが、「目標」になります。目標とは、目的を達成するための指標と言うべきもので、この指標を意識して取り組み、その達成度合いを確認することで進捗を確認するということになります。この目標が国立教育政策研究所の研究では、「学校が楽しい」「みんなでなにかをするのが楽しい」「授業に主体的に取り組んでいる」「授業がよく分かる」などの児童生徒の意識（声）調査であり、これらを高めることとなります。

### 「手立て」としての、居場所づくりと絆づくり

次に「目標」にアプローチするための「手立て」を考える必要があります。何もせずには子どもの意識の向上はあり得ませんので、「居場所づくり」と「絆（きずな）づくり」という方法をとるということとなります。

**居場所づくり**  
教職員が、児童生徒が安心できる自己存在感や充実感を感じられる場を提供すること（安全・安心な環境づくり）

**絆（きずな）づくり**  
児童生徒が、主体的に取り組む活動等を通し、自らが仲間との「絆」や学びとの「つながり」を感じ取り、紡いでいくこと（仕掛けは教師）

この2つの手立てを考え、実践するということになります。

「目的」と「目標」

「目標」と「手立て」

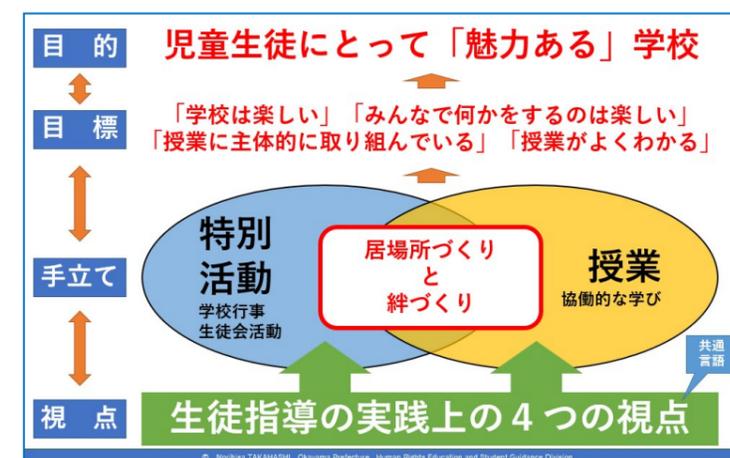
## 共通実践を進めるための「視点」

居場所づくりと絆（きずな）づくりは、授業を中心としたすべての教育活動の場で全教職員で実践しなければ効果は望めません。そのためにも、「視点」を共有し、互いの実践から学び合う環境を整えることも重要です。

学校教育活動で行われる、教科指導や特別活動はそれぞれに特性があるため、内容が専門的になればなる程、連携が取りにくくなるように思います。そこで有効なのが、すべての教育活動の中に存在する「生徒指導の実践上の4つの視点」です。これを共通の「視点」（共通言語と言い換えることもできます）として持ち、それぞれの実践をつなぐということになります。実践そのものを真似るのではなく、実践の中の「視点」を取り込むということです。

- 視点1：自己存在感の感受への配慮
- 視点2：共感的な人間関係の育成
- 視点3：自己決定の場の提供
- 視点4：安全・安心な風土の醸成

「手立て」を行う上での「視点」



【図】魅力ある学校づくりのイメージ

### 立ち位置を確認して

どのような実践を行う上でも、目的が単なるスローガンになったり、逆に手立て（手段）が目的化して、やりさえすれば良いということに陥ってしまえば、効果は望めません。常に、今、話し合っているのは「目的」なのか？「目標」なのか？「手立て」なのか？「視点」なのか？の確認をして、同じ土俵に立って共に考えるということが大切です。

そして、それぞれの関係を大切にすること、どんな手立ても必ず目的・目標とする到達点を見据え、その関連を意識した計画→実践→振り返りの流れを重視するなど、下（細部）から上（全体）を見る視点と、目的を細分化することで常に到達点を意識した実効性のある取組にするなど、上（全体）から下（細部）を見る視点、この両方を心がけたいものです。

### POINT

「目的」⇔「目標」⇔「手立て」⇔「視点」を意識する



『提要』のダウンロードはコチラ